



1636年～1869年(約230年)

## 伊予西條藩を知る ③

(第一次西條藩)一柳家、(第二次西條藩)松平家



旧福武村の讃岐街道(旧国道・遍路道)に、首のないお地蔵さん(首無し地蔵)があられます。この起源は江戸時代初期、伊予国西條藩(3代藩主一柳直興 | ひとつやなぎなおき)で起きた「大保木銀納事件」にある。大保木(おおびき)とは、崖を意味する「大歩危(ほき)」から来た名前前で急峻なという意味で、そんな困難な生産条件の下での大保木地区(中奥山村、黒瀬村、大保木山村、西之川山村、東之川山村)の五カ山農民は、お米が満足に穫れず加重な物納年貢賦課に苦しんでいました。

寛文4年(1664年)、米の不作が続き米価の高騰により米納の為の買米が困難になり生活困窮に陥った為、見かねた中奥山庄屋・工藤治兵衛(くどうへい | 当時33歳)は、五カ村民の代表となり、米の代わりに年貢を銀(お金)で納められるように西條藩主に死を覚悟して「五カ山庄屋五人連署血判の銀納願」を直訴しました。(※江戸時代は、百姓が藩主にはむかうとただでは済まない時代でした。)

しかし、治兵衛らの訴えは認められず、無残にも問答無用のような形で、治兵衛の家族(男子)も含め16人が捕らえられ、1664年11月28日大雪となった寒い朝に、なぎの木さんで打ち首となりました。

特に、首謀格の治兵衛一家は子供に至るまで処刑され、なかでも哀れなのは幼児の五男・林蔵(1歳)で打ち首の際、太刃取りの役人は恐怖を与えないためか、子供に蜜柑(ミカン)を与えると喜んでこれを食べはじめたところを後ろから首をはねました。すると、真っ赤な血潮が吹き上がり、頸の切り口から蜜柑の房が飛び散った、という陰惨な話がありました。(西條藩・西條誌より)

それから6年後に銀納は認められ、村の人々の命を救った史実に基づいた事件がありました。福武におられるお地蔵さんは、この銀納義民たちを大変不敏に思っ、「首無し地蔵」をたて、その霊を慰めたと言われています。



※工藤治兵衛一家男子 · 治兵衛(33歳)、長男・利左衛門(15歳)、次男・申松(13歳)、三男・文太郎(11歳)、四男・文四郎(9歳)、五男・林蔵(1歳)。

打ち首は、直訴の首謀者に対する厳罰として逆縁(仏教用語:親より先に子が死んでしまうこと)、つまり幼子から順に斬って(打ち首)いった。

工藤治兵衛ら16名が処刑された翌年(寛文5年7月29日)、庄屋・治兵衛一家の残虐な処刑、諫言した家来への切腹申しつけの件(四忠臣諫死事件)、参勤の遅れなど一柳直興の失政を理由に、一柳家は幕府の裁定により改易となり、直興は加賀の前田家(前田綱紀)へお預け。西條藩は、天領つまり幕府直轄地となり五年後に徳川家康の十男にして紀州初代藩主である徳川頼宣の二男・頼純が、松平姓を名のって西條松平初代藩主 松平頼純 となった。

※寛文5年(1665年)7月29日、3代藩主一柳直興は職務怠慢や失政などがとがめられ一柳家は改易され、身柄は加賀国金沢藩主の前田綱紀にお預けとなった。ただ、預けられた前田綱紀は、鄭重に扱い厚遇したことが種々資料から窺え、直興の人物評価はすこぶる高く、器量も随分ありとし、とても罪人とは思えない様に書かれている。直興は貞享三年、前田綱紀の幾度にわたる幕府への申請により幽禁二十二年罪を許される。